



大衆文学大系

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

28

富田常雄
山岡莊八
村上元三

大衆文学大系 28 富田常雄 山岡荘八 村上元三 集

昭和四十八年八月二十日 第一刷

著者 富田常雄 山岡荘八 村上元三

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二番一 郵便番号 一〇二
電話東京(〇三)九四五一一二二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 三四〇〇円

©富田正一郎 山岡荘八 村上元三

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

富田常雄集

姿三四郎

五

山岡莊八集

御盾

三

村上元三集

颶
風
の
門

年 解 解
譜 題 說

堯 夷 志 三

富田常雄集

姿三四郎

卷雲の巻

傳くるま

一

撫でるように降りすぎて行った夕方の驟雨しゅうりゅうの後は、春の宵らしいおぼろ月が出た。

連雀町の八百屋の細い横丁を入れて四五軒目だと覚えていたが、暗いせいか昼間見ておいた看板がすぐには見つからなかった。

心明活殺流柔術指南 門馬三郎

その大きな看板をやっと見つけて、がたがたの格子に手をかけた時、三四郎は家内に大ぜいの人の気配を感じた。

昼間はその活殺流の大看板が春の埃ぼいっぽい強風にあおられてがたりがたりと揺れていて、家内には人の気配もなかった。

おとなり三四郎の声をきよつけて、向い側の駄菓子屋の内儀が、

「柔術の先生は浅草の奥山へ稼ぎに出かけてますよ、行ったら会えるでしょ、なんでも剣術の居合抜きと組んで見世物へ出てるんだそうですから」

と、教えてくれた。

「そうですか、弟子はとるでしようか」

「書生さんは弟子になろうっていうの」

「はあ」

もの好きな、という顔で、内儀は三四郎の白縞のよれよれの袴をじろりと見て、

「今時、柔術だの、剣術だのと言ってちゃ食えないからね、浅草へ出るようになるんだらうけど、書生さんも柔術屋さんになるつもりなの」

「そういうわけではありませんが」

三四郎はあまり長く話していたくなかった。

「弟子はとるでしようよ、妾が、帰って来たら言っというてあげる」

「はあ、お願いします」

三四郎が頭をさげて踵かかとをかえすと、内儀は捨科白せせりやまのようにつけ足した。

「なんしろ、駄菓子子の借りも払わない先生だからね」

埃ぼいっぽい風の中を歩きながら、三四郎は腹が立った。

剣術や柔術が野蠻だという時世——から十まで文明開化で押してくる時世の波は柔術家を見世物にし、駄菓子子の払いまで借りさせたのであろう。そう思うと、相手がどんなに貧乏であるにせよ、見世物にまで出ているにせよ、弟子になろうという意志は変らなかつた。

昼間とは違い、夜おとずれて見て、このうらぶれた柔術家の
住居が賑やかなのが、三四郎の心まで明るくした。

声に応じて玄関のやぶれ障子をあけて、きれいに頭の禿げた
緒顔の大男が顔を出した。

禿頭は持前らしく、年は四十がらみでまだ精気が溢れて居
た。

「昼間うかぶった者です、先生はおいででしようか」

「わしが門馬だが」

三四郎はあらためて頭を下げた。

「入門さしていたよきたいのです」

「入門か」

門馬三郎は気のない返事をして、

「上がり給え」

顎をしゃくって促すと、さっさと奥へ引き揚げた。

玄関の板敷の間についで、すぐ十二畳の部屋があった。吊
ランプが一つ、壁に稽古着が四五枚ぶら下がっているきりで額
一つない部屋だ。道場ともなり、寝室ともなるのだろう。他に
部屋らしいものがなかった。吊ランプの下に車座になって、六
人ほどの人間が一升徳利に茶碗で酒を飲んでいた。

三四郎はその一座に向って一礼した。

「姿三四郎と申します」

袴をつけたのも、着流しのも居たが、どれも骨格はたくまし
く、三十前後のものが多かったが、なかの一人が、

「入門か」

と、門馬にきいた。

「うむ」

一座は今までの話を中断した形で、小柄な三四郎を好奇的な
眼で見た。

「どここの生れた、君は」

門馬の舌がもつれるのは酔のせいであろう。

「会津です」

「柔術をやったことがあるかね」

「故郷で少しやりました」

「何流だ」

「天神真楊流の大曾根俊平という人です」

「ほう、きかんな、そんな男は」

「七十二のお爺さんです」

「はっはっ、そりゃ古い」

門馬三郎が言ったので、一座がそれにつれて笑い出した。

「併し、君の体で柔術は無理だろう」

「どうしてでしょう」

「小さすぎる」

「僕はそう思って居ません」

三四郎の言葉は、ぼきりと折るようであった。

「術でいくというのか」

「はあ」

「なる程、それもよからう、学士様の矢野正五郎でも言いそ
うなことよ、なあ、八田」

と、門馬は側の一人に話しかけた。

「大学出の学士が理屈でこねた量水練なら知らぬこと、柔術は
そうはいかんよ。まあ、君なぞは絃道館の矢野の処へでも行け
ばよろこばれたらうな。知らんか、矢野を」

「はあ、名はきいたことがあります、一度稲荷町の隆昌寺の前
を通って、道場だけは知っていますか」

「それよ、寺で柔術をやっているそらだが、驚いたのは本堂の
位牌と坊主ぐらいなもので、位牌は毎日ひっくりかえる、根太

はゆるむで坊主泣かせのとんだ道楽だ。東京大学出の学士で学
習院の講師というのだから、その職業で満足していればいよの
に、大それた事を企むから氣に喰わん」

門馬は肩をつり上げた。

一座になにか殺氣をおびた沈黙が流れた。

「妾君とやら、入門料は五十銭だが、持って来ているか。当
時、柔術家は貧乏で、う、はっはっ」

三四郎は黙って金を出した。

「入門帳と言いたいが、そんなものは要らんだらう、稽古さえ
つけてやればよからう、心明活殺流は矢野正五郎の学士柔術と
は違って、なんでも理屈ぬきだ」

一一

大分、酒が廻つたらしい。

一座の興奮は熱をおびて来た。

「日本には古くから柔術という名がある、それを柔道とかいう
ものに変えようというのは、思いあがつた事でなくてなんだ」

百日鬘のような頭が怒鳴った。

「日本伝道館柔道か、ふん、盪水練がなにをほざく」

「我々は御一新以来、ひどい境遇におとされて、なお且つ日本
の武道のために戦つて来た。俺達は浅草の見世物に出る。こい
つは恥かも知れん。しかし、それもこれも、やがて花の咲く日
が来るのを楽しみに忍んで来たんだ。警視庁が武術世話係を置
くことになって、どうやら陽の目を見ようとする時、開化の時
世を当て込んだような学士の若造の柔道などというものに警視
庁まで乗取られては堪らんから。正に斬るべしだ」

「そうよ、若木のうちにぶつた切るにかぎる。八田、一ぱい飲
め、これから少々体を動かさんければならんからな」

門馬は八田という、この仲間では最も精神な顔つきの男に茶
碗をつきつけた。

受けて、

「しかし、矢野はどのくらい出来るかな」

と、八田は考え込むような眼をした。

「知れたものよ」

「そうでもあるまい、天神真楊流の磯正道にもついたとい
し、起倒流の飯沼恒民と五分だともいうし、上だともいうから
な」

「飯沼は竹中派の高弟で、あれは免許皆伝だが、矢野にそれだ
け出来るか、どうか」

「その飯沼さえ、俺達と同じ境遇で今は駅通局の雇員だ。時世
が悪いのよ、面白くもねえ」

吐き出すように言つた一人がごろりと横になった。

「寝るな、根本、仕事はこれからだぞ」

「なあに、矢野の一人ぐらいひねるのに固くなることはあるま
い、この節は酒もろくに飲めねえから、酔うのも早い、情けね
え御時世よ」

三四郎は始終黙っていた。

だが、その場の空気がたゞのものではなかつたし、その荒んだ
感情が三四郎を苦しくさせた。

この人々は我とわが身を滅ぼしている。武術家らしい気品も
なく、高邁な気宇もなく、たゞ自暴と妬心だけが大きく生活に
陰をつくるのである。時世を呪い、すべてをそれに帰せようとす
るが、彼等は世から省みられない原因を自分自身でこしらえつ
つあるのだとしか考えられなかつた。

荒んだ柔術家として世の鬘を買いうのは、彼等自身の行状で
あつた。

「娑君」

門馬が、この時、端坐して腕を組んでいた三四郎を呼んだ。

「入門のしるしに一ぱいやらんか」

「僕は飲めません」

三四郎は微笑してみせた。こんな酒は飲みたくなかったし、すでに、入門することも断念して居たのである。

「実はな、今夜、われわれの手で矢野をやっつけるのだ」

「殺すのですか」

「殺しはせんよ、はっはっ、気絶さすくらいだろう。不具になるかどうかは保証のかぎりではないが、懲しめるのだ」

三四郎は愉快ではなかった。

「すると、闇打ですな」

「今夜は錦町の今文で学習院の講師連中の会がある。その帰り道を待って野仕合をしようというのだ。書生の昼水練に心明活殺流の柔術を見せてやるのだ、後学のために君も見ておくところしい」

「朝野新聞や日々新聞に矢野が襲われて跛びつこになったなど出ればこっちのものよ。ふた葉のうちに刈り取るわけだ。跛でも学校の先生は出来るから殺生でもあるまい」

根本が口元に冷たい笑を浮べて起き上がりながら言った。

あわたとしく格子を開ける音がして外から、

「先生」

「お、仙吉か、どうした」

「出ました、すぐ来て下さい」

「どっちへ行く」

「今文を出て俵に乗ったが、道は一本だ、めがね橋を渡って上野へ向かうに違いありません。早くしねえと逃がしますぜ」

「よし来た」

門馬が起った。つゞいて他の六人が異様な緊張を見せてはたばたと起つと、もう玄關へ飛び出して居た。

「武器は持つな、持っては活殺流の恥になる」

門馬のせきこんだ声が格子の外で、

「思いきり、敲たたきのめせ」

「人目はいゝかな、なん時だろう」

「十時を廻った。なあに、見られても構わん。娑君、君も来い」

門馬は内へ声をかけた。

三四郎は言われるまゝに外へ出た。

月がかくれ、彼等の襲撃に屈強な暗さを与えて居た。

その時、十二三の娘が弁当箱をかゝえて闇の中から浮いて出たように門馬の前に現われた。

「お父さん、何処かへ行くの」

「澄か、一寸、行ってくる」

「今夜、帰るのね」

「うむ、すぐ帰る」

他の六人は、仙吉と呼ばれた遊び人風の男を先に、足音を忍ばせて駆けて行った。

三四郎はその娘とすれ違った。

工場へでも通っているのか、見窄みせまらしい服装だったが、大きな眼と、その色の白さがくつきりと眼に残った。

三

提灯が一つ、遠くからゆらゆらと揺れて近づいて来た。

「あれか」

と、八田が低いくぐもるような声を出した。

「仙吉がしらせるはずだが」

門馬のいらいらした言葉がその会話にかぶせるように、

「違ったのじゃないか、道が……あの俵は柳原の方へゆく奴だ」
提灯の灯は六人のはるか向うを左に揺れて消えて行つた。

俗称めがね橋と呼ばれる石造の万世橋の袂に六人はうすぐま
るようにして矢野正五郎をのせた人力車を待つて居た。

瓦斯燈の灯が夜霧にぼやけて、今夜は夜啼きうどんの呼声も
せず、神田川の黒い河面におぼろに眼鏡形の倒影をうつした万
世橋のあたりは月のない闇の底にとり残されて、夜は沈々と更
けて行つた。

その闇のなかにせわしい草履の足音がして来た。

「門馬先生」

「仙吉か」

息を切つて、

「来やしたぜ、野郎、俵に乗る前に半刻も人と立話をしてや
がったんだ。走り出してから俵の先になつて飛んで来たんだ
が、もう来ますぜ」

「よし、御苦労」

見張りの仙吉がふところの手拭で汗をふく間も待たず、ゆれ
る提灯の灯がめがね橋に向つて近づいていた。

「根本、車夫を片づけろ」

「うむ」

矢野正五郎をのせた人力車ががらがらと轍の音をさせて、瓦
斯燈の青い光芒のなかにちらりと車体を浮かせてから橋を渡り
切ろうとした時、先陣を承つた根本が殺氣そのものゝような黒
い弾丸となつて体を丸めて飛び出した。

「ひえーっ」

車夫が悲鳴をあげて前にのめつた。

弾みのついていた膝頭をぼんと蹴られただけだったが、その
まゝ、棍棒のなかに胸を伏せるような恰好で前に倒れると、俵

はぐらりと一つ揺れて横倒しになつた。と見る、前のめりに俵
から放り出された矢野正五郎は倒れた車夫の背中にかるく右手
を当て、宙に一つ返ると、いつか、すつくと瓦斯燈の光のなか
に突立つて居た。

めがね橋を渡る時から、すでに殺氣を感じて居たのである
う。

着ていた五つ紋の羽二重の羽織を眼にもとまらぬ速さで脱ぐ
と、倒れた人力車の車輪の上にふわりと投げて、仙台平の袴の
股立をとつていた。

草履を脱いだ白足袋がすがすがしく夜眼にもくつきりと浮い
て、二十三歳の若い柔道家はばらりと前額にふりかゝつた長刈
の黒髪をそのまゝ、すでに神田川の黒い水を背水の陣に、めが
ね橋の袂の青白い瓦斯燈の光の輪のなかに猛虎負嶼の姿勢と
なつて立つて居た。

向う側の橋の隅にうずくまつた姿三四郎が矢野正五郎のこの
素速い構えの見事さに我を忘れて呆然と瞠めている時、正五郎
の落ちついた声が活殺流の陣にひびいて来た。

「絃道館の矢野正五郎である。人違いか、それとも闇打か」

「ちっ」

舌を鳴らしたのは先陣の根本であつた。

「名乗れ、素姓を」

鋭く矢野正五郎が叱咤した。

「心明活殺流」

たゞきつけるように叫んで、腰をかゞめて隙をねらつていた
根本が正五郎の手に飛び込んだのは殆ど同時だつた。

声のない水月の当身か、根本の腕が正五郎の胸元へのび切つ
た時、一步、後へさがつて体を開いた正五郎の片手が相手の手
首にかゝる。ひかれて、根本が後へ引こうとした時は己に二人

の位置が變つて根本の後は神田川の水。反身になって力を入れた根本の上半身に力がこもりきつたと見えた。鬘髪、矢野正五郎の体は音もなく一本の棒のように仰向けに我と倒れて、根本の両足が宙に浮いて頭を下にはねあがると、そのまま神田川に耳を驚かす水音をあげて落ちた。

真捨身業には違いないが、三四郎にはこの見事な業の判断もつかなくつた。

残る五人――

矢野正五郎はすでに川を背に最初と變らぬ姿勢で立っている。

我から寝て、業をかけて起きあがるまでの速さは一陣の風が過ぎるのに似ている。

中堅の三人が無言で輪を作ると、じりじりと腰を落して進んで行った。

言葉の上でも思い切り相手に罵り勝とうとする心理が働いて、気合で突掛れば今少し業に迫力が加わったかも知れなかつたが、なかの一人が、

「若造っ」

と、おめいてから、

「来い」

声と一緒に正五郎の着物の袖を鷲つかみにして、右足を相手の背後に飛ばすと、思い切った大外刈に出た。

崩れていない正五郎の体勢に力一つの強引な業をかけて行ったのは笑止であつた。

袖を振り切られて、柳に、風が肩をすかさされたように六尺豊

かの大男は我とわが力で二三歩たゝらを踏んだ。

その延びきつた腰の辺を白足袋で一突き蹴られると、両手を鳥追い型にひろげて、すさまじい水煙を神田川にたてゝいた。

残る二人は当身か、固業で正五郎を地上に転がして仕留める他に術のないのを悟ってか、右と左に別れて肉薄した。

と、守勢だった矢野正五郎の体が閃いて、いきなり、右の敵に飛び込んだ。

「えい」

はじめ、彼の唇を夜気をつんざく裂帛の気合がもれた。

組み合った二つの力が相互に引き合つて腰を落したと見ると、又も、右足が相手の内股に軽くかゝつて、矢野正五郎の体は仰向けに倒れて、相手は宙を、体をすくめたまゝもんどり打つて一気に神田川に飛び込んで居た。

隅返しすみがへしの玄妙な業である。

見ている三四郎の両の拳のなかは汗で一ばいであつた。

最初の驚きは恐怖に變り、次に恍惚たる陶酔の境地に彼を追いやつて居た。

六尺豊かの大男を三人、五尺二三寸の小さい体で苦もなく一瞬に、しかも、正確に後の憂いのないように河へ投げ込んで息一つ切らしていない正五郎の全身に神秘な空気をさへ感じるのである。

そうした感慨を持った三四郎の眼の前では――

鬘志を燃やして挑みかゝつた四人目の相手が正五郎の背の上で足をばたつかせたのを名残りに、もう、暗い水面に飛び込むような姿勢で頭からもぐつて居た。

四

「くそ……」

後詰めご詰めの八田が精悍な全身に殺気をみなぎらせて、つかつかと出る、これは一人で正五郎の前に仁王立に立った。

脱み合つた。

正五郎が微かに口元へ笑いを湛えたように思えたが、そのま
ま、両方ともに動かない。

八田の体すべてが殺気と闘志に包まれて、触れれば火を發し
そうなの反して、矢野正五郎の備えには殺気もなく、たとえ
れば春の野原に春風に吹かれている人間のような柔かさど和や
かさが漂って、それが極端な対照をつくり、空気をかもし出し
ているのである。

こんな死闘の場面はあり得べきでない。

あるとすれば、これは已に矢野正五郎が相手を完全に征服し
た後の姿でなければならなかった。

その一瞬の負けを悍馬の猛りに似て、鋭くなった八田の神経
が感じないはずがなかった。

拳を固めて一気に正五郎の眉間をねらった。

必ずしも、この成功を期したわけではなく、相手を組みに誘う
ためである。

正五郎の右腕がその拳を受けて頭上へ流すと、鳩尾たまたげをねらっ
た八田の左拳はぐっと矢野の拳に抑えられた。

そのまゝ、正五郎はひた押しに押しして来た。

もつれ合つた右手は互いの肩口をつかんで居たが八田はたじ
たじと三歩、四歩後退せざるを得なかった。

腰を落して押しして来る正五郎の力に浮いた腰を立て直して喰
い留めると、本能的に八田は満身の力をこめて押し返した。

押せば押し返す――

相撲の観念が無意識というより、不覚にも八田の心理に働き
かけたのであろう。

押されたという無念が心明活殺流の免許皆伝の術心を鈍らせ
て、八田は嵩かさにかゝって押しした。

二歩、三歩、四歩。

後退した矢野正五郎のすぐ背後には、今、同僚が四人まで投
げ込まれた神田川が上げ潮の水を満々と湛えて待つて居る。

そのまゝ、その水のなかへ正五郎を押し落しても構わぬ。い
や、落そうという焦りの方が強かったと言える。

八田は押しした。

後、一間……と見た。

「えい」

気合と同時に矢野正五郎は相手の押しして来る力の下に身を倒
して、右足がその下腹にかゝつたが、八田は我とわが力を利用
されて正五郎の右足を軸にあざやかな拋物線を書いて宙をぶっ
飛んだ。五つの人間を続けざまに呑んだ神田川の水がざぶざぶ
と波紋を描いて、自分から倒れた正五郎の頭のすぐ下の岸に波
はびちやりとぶつかってはねかえつて居た。

三四郎の驚嘆は感激に変わった。

これほどのあざやかな柔術を文にも絵にも實際に見たことが
なかった。

魂を奪われて、彼が河岸に立った矢野正五郎の静かな、細身
の姿を惚ればれと見上げた時、門馬三郎が猪のように唸り声を
あげて正五郎の足へ泳ぐようにしがみついて居た。

立業で敵せず、当身業の利かない相手であつてみれば、門馬
三郎にとってはこの一手しか残つて居なかつたやう。

足へ喰いついて引きずり込んで逆か絞めでやる他はない。
腕をへし折つてやるか、絞め殺すか、いずれも選ばぬ殺気に
燃えていた。

正五郎が寢業に引きこまれた。

二つの体がかみ合つて地上を転がった。

一瞬である。

うつ伏せに膝の下に押えられた門馬三郎の地面に顔をすりつ

けた口からうめきもれた。

右腕を逆^{さか}に極められたのである。

「うーむ」

ぐきりと骨が鳴った。

「名を言え」

「うーむ、こ、殺せ」

「殺さぬ、腕も折らぬ、名を言え」

「いゝから殺せ」

あつ、あつと門馬三郎はあえいだ。

「頭が禿げているな、それにしては愚かな男だ」

明るい声である。

「大将だろうが、なんの恨みだ」

「恨みじゃない……こ、こらしめだ」

「私をか。はつはつ、頭を禿げさして愚かな事を言う、そんな事では武術家は廢るばかりだ」

撥ねのけようとして、門馬は逆の手を強められ、あつ、あつとあえぎつゝけた。

「うーむ、き、貴様のような若造に恥を……恥をかいて生きて……」

「その気持を柔術に生かしたら尊かつたろうに。惜しい」

手を放して正五郎は立ちあがった。

その足の下に四つん這いになった門馬三郎は起き上がる代りに這って河岸に近づくと、自分から飛び込んだ。

ぬれ風になって岸へ這い上がった仲間と同じ道を選んで――

流石にこれ以上の恥辱と敗北には堪えられなかつたのである。

矢野正五郎はふり向きもせず、袴の股立をはずして、人力車の車輪にかけた羽織をとるとゆっくりと着て、白い平打の紐を

結んだ。

「俵屋」

静かな声で呼んだ。

車夫は最初の打撃に胆を冷やして遠く逃げのびたのか、返事がなかつた。

「俵屋、もう大丈夫だぞ」

正五郎は四辺を見廻した。

「逃げたか」

つぶやくように言つて、歩き出そうとした時、三四郎は矢野正五郎の前に出て、地面に膝を折り、両手をついて居た。

身内を吹き荒んだ感激がそうさせたのである。

「先生、私がお供します、お乗り下さい」

「君が俵を挽くのか」

「はあ、三日前まで俵屋をして居ました。下谷のうめ堀の隆昌寺へお帰りになるのですか」

「うむ」

三四郎は転がつていた提灯に手早く火を点け、倒れた人力車を起して二三度、前後に押し車輪を試した。

「大丈夫です、先生」

「そうか、では頼もう」

三四郎は袴を脱ぎ、尻をからげた。

正五郎のをせると下駄をぬいで、そのまゝ一散に走り出した。

残した下駄も惜しくはなかつた。

素足の下に踏む小石の痛さも忘れた。

あれだけの死闘に荒い息さえたてず、しんと静まりかえつて車上にある人に対する畏敬と感激だけが心にあつた。

敵か味方か、この車上の若い柔術家はたしかめようともしな

かった。

三四郎の素性もきこうとしなかった。

三日前まで辻傳の車夫をして苦学して居た自分の技術が役立ったのがしきりに嬉しいのである。

三四郎は胸をわくわくさせながらも、たゞ、黙々と走った。

車上の矢野正五郎も亦、問いも、語りもせず、腕を組んで星を眺めて居た。

柳のかげ

一

簾越しに射す初秋の陽ざしは未だ焼けるように暑い。

長寿庵の奥座敷で三四郎は飼猫の玉と遊んでいた。遊んでいるというのは適當ではないかも知れない。

猫をつまみ上げては四足を両手に持つて二尺ぐらいの高さから落すのである。その次には一尺ぐらいの処から落した。その度に玉はくるりと身を翻して四つん這いになる。

今度は五六寸の高さに持ち上げて、ぼんと落して見た。背中に畳につくか、つかぬかのきわどい処で玉は身をくねらして四つん這いになると、辛かったのだろう、三四郎の顔を恨めしうに見て、にゃあと鳴いた。

「むむ」

三四郎は、唸って、それから考え込んだ。

猫の身を翻す時の動作と呼吸とを思いかえしているのである。

「出来ないことはあるまい」

独り語を言った。

つまり、三四郎は玉と遊んでいたのではなく、玉を研究の対象にして、どうして、宙返りをするかを工夫していたのである。芝居で見るとんぼ返りならば容易だが、投げられた瞬間に身を翻して、背中をつかぬというのは易々と出来そうもなかった。

向うへ来るのは弥左衛門

あれにさわるな弥左衛門

よけて通せよ弥左衛門

と、その昔、童謡にまで歌われたという、関口流柔術の流祖関口柔心は、ある時、屋根に居眠りしていた猫がもののはずみで庭へ逆になって落ち、死んだと思ったら、ひらりと身をひねって四足で立ち、のそのそと庭を横切って行ったのを見て感心して、自分も屋根から落ちて受身の稽古を始めた。

初めは藁や布団を積んでその上に落ちる稽古をしたが、後にはかなり高い屋根の上から落ちても身を翻して地上に立つことが出来るようになり、柔一流を開いたという。

この話は会津の故郷で大曾根老師から聞いたのである。

三四郎はそれを思いかえしながら、自分も稽古をして見ようと考えた。

それにしても暑かった。はいて居た袴をぬぎ、ごろりと大字なりに倒れて天井を睨んだ。

「まあ、なんですね、その恰好は、……今しがたまで玉をいじめて居たと思えばもうこれだ、まるで駄々っ子だよ」

吉原つなぎの浴衣を思いきり抜衣紋ぬきえもんに着た内儀のお幸が冷麦の井を盆に載せて入って来た。

とんび足に三四郎の胸元へ坐って、

「ほんとに矢野先生は立派ね、昨日も学校からお帰りなさる処

を見たけど惚れればれる、あのやさ男で、柔術が巧いのか知ら

「巧い」

「士さんだもの、柔術家の真似をしないたってよかりそうなものに」

「大きなお世話だ」

「妾なんぞには手がとどかない殿御だけど、まだ、奥さんもきまった女もないの」

「僕は知らんよ」

「なかなか、先生思いね」

三四郎はくるりと起きた。

「先ず食おう」

冷麦を無心に食べ出した三四郎の顔を、お幸はしげしげと眺めて、

「ほんとに、婆さんは子供ね」

十七の時、会津から出て来て、この一年の間は辻傳の車夫をして苦学したという、未だ二十歳の青年の濁らぬ眼の色や、紅い唇、整った顔立ち、ことに、その濃い眉とつやのある髪の手毛が大きな魅力となってお幸を牽きつけた。

四十に手のとどかぬお幸である。

「小母さん、今度はもう蕎麦が食べたいな」

三四郎は頭を上げて訴えた。

「もう、およしなさい」

「なぜ」

「なぜでも……」

「小母さん、昨日、僕は借りを払ったぞ」

「ふっふっ」

無邪気な三四郎の様子がお幸の感情をくすぐった。

「お酒でもお飲みなさい」

「酒……、なぜだ」

「暑気払い、妾が飲むから、貴方はお相伴すればいいのよ、ね、貴方は長寿庵が好き、妾が好きだと言ったでしょう」

「それは好きだ」

三四郎はぼつりと言った。

四つの時、母親を失って、十二まで父親の男手で育った三四郎は母に近い女になつかしきを感じていた。父に死なれて天誹孤独になってからは家庭の暖か味といいたものが恋しかった。

長寿庵や、後家のお幸がその条件にかなって居たというのではない。

隆昌寺の道場生活は飯炊きのおせき婆さんの他は男ばかりの荒削りな生活である。その荒涼とした修業の日々、時折り、彼は堪らぬ焦燥を味わった。潤いのあるものが欲しかった。

暖かい家の匂いが恋しかった。

長寿庵に蕎麦を食べに来たのが機縁になって、親切なお幸に暖か味を感じるようになり、蕎麦を食っては無駄断をし、昼寝をする。二三日来の道場生活の疲れがぬけるようで、三四郎はそれで充分に満足し、心が和むのである。

師範の矢野正五郎が学習院に出勤した後、こっそりやって来た。

長寿庵は隆昌寺から三町ほどの、うめ堀にあった。

二

簾に当って居た西日がかけて、座敷のなかは涼しくな

た。お幸は眼の縁を赤く染めて、四本目の銚子をとりあげて三四郎に酌をした。